

研究テーマ 地域包括ケア病棟における在院日数40日超過患者の特徴と看護課題

病院名 医療法人社団健育会 西伊豆健育会病院

演者 ○^{まつもとみきこ}松本美紀子(看護師) 須田彩花(看護師) 関幸江(看護師)
藤井聡(看護師) 大村啓子(看護師)

概要

【緒言】

地域包括ケア病棟は2014年に開設され、役割は治療と共に在宅復帰に向けて支援、準備する病棟である。2024年の診療報酬改訂では、入院41日目以降は減算となり、患者にとっても長期入院は運動や認知機能の低下、身体的合併症のリスクにも繋がる。入院期間を最大限に活かし、適切な看護支援が不可欠になる。地域包括ケア病棟入院40日超過の課題を明らかにする必要があると考えた。

【目的】

高齢化率が最も高い地域に位置するA病院の地域包括ケア病棟において、在院日数が40日を超過する要因および患者の特徴を明らかにするとともに、看護師が対応すべき看護課題を抽出する

【方法】

- 研究デザイン: 診療録を用いた後ろ向き記述研究
- 調査期間・対象: 2024年6月～2025年3月までのA病院地域包括ケア病棟退院患者355人
- 研究方法: 調査期間の対象患者データを収集し、在院日数40日以内、40日超過の2群間に分け、項目度数を分析する

【結果】

入院中の介護保険区分変更、介護保険取得状況は、40日超過群のうち新規に介護保険を申請取得した人は23.9%であり40日以内群と比較し有意に高かった。入院前の在所、同居の有無について有意差はなく、退院先においては40日超過群は自宅以外が多かった。入院時のBI比較では40日超過群が優位にポイントが低かった。

身体的要因として、40日超過群は入院中に肺炎、尿路感染症に罹患した人が有意に多く高齢であった。オムツ利用やバルンカテーテル留置の割合には差がなかった。

【考察】

介護保険の新規申請・区分変更は在院日数の長期化に影響しており、先行文献と同様の結果であった。地域包括ケア病棟入棟前からの申請手続きを準備し、支援することが有効であると考えられる。A病院は僻地にあり高齢化が顕著で、家族は遠方の為、対面で関わる機会が少ない。さらに、退院先の希望が一致せず、退院先の決定に難渋すると考えられる。入院中の肺炎と尿路感染症が入院の長期化に影響しており40日超過群全員が高齢で慢性疾患を有していた。個別の病状に合わせ、歩行能力をはじめとした身体能力を向上させることが嚥下能力を高め肺炎防止につながると考える。

【結論】

- 入院中の新規介護保険認定や、区分変更が入院を長期化する要因となっており、急性期一般病棟からの転棟は転棟前から申請手続きを準備し、支援することが有効である。
- 自宅退院を希望している患者の退院先決定には時間を要する為、早期から多職種で連携し、想定される生活環境にあわせたりリハビリテーションの実施が必要であり看護師には患者の意思を傾聴し多職種間の調整を図る役割がある。
- 入院中に肺炎・尿路感染症に罹患することは入院期間の延長を招いている事が確認できた。患者の運動量を上げ、セルフケアの向上を意識したケアが感染防止につながる。